

第 11 回森を育てる会 勉強会 竹勉強会報告

日本全国で竹が侵入した森林の荒廃が問題となっています。油山自然観察の森でも樋井川の源流である溪流に沿い南区柏原の民有地と接する二次林（通称ウグイス橋そば）に竹が侵入しています。この一角を森会で保全できないか、と会員から意見が出て会内部での検討会を昨年実施しました。しかし参加者の思い様々で保全をするのか、するなら竹林にするか、二次林にするか、という方向性が決まりませんでした。

そこで引き続き検討のため今年度は2回の活動日で枯れた竹を片付け、今後を勉強会で考えることになりました。勉強会では「山の声」を講義と現地見学で森林の専門家からうかがい、ワークショップで竹侵入地への会のかかわりを考えました。結果はうん・えー会に報告し検討します。

【日時】

2007/12/8（土）
10時～15時10分

【内容】

講義・フィールドワーク・ワークショップ

【講師】猪上信義氏
（福岡県筑後農林事務所）



1. 講義 竹について

(1) 森林について

森林や植生の様相は標高、環境、人間の関与によってきまる。人間が関与しないと福岡県では標高 800m 以上では落葉樹林、それより下では常緑樹林となる。伐採、火入れなど人為がかかると植生は変わる。

(2) 竹について

竹は暖かい場所を好み標高 500m



以下の場所にある。その周囲には里山、杉・桧林、二次林がある。竹はササ、タケ（狭義の）、バンブーに大きく分けられる。またタケのグループの中では、モウソウチクは節が一重、マダケ、ハチクは二重という特徴で見分けられる。

竹は地下茎が横に走りそれで広がる生態をもち、これが竹拡大の原因でもある。

土壌の豊かな、水分が豊富な土地を好む。硬い道路や岩盤は地下茎が越えられない。

(3) 「侵入竹」発生の事情

マダケは奈良時代前後、モウソウチクは江戸時代に中国からもちこんだ。マダケは竹材としてモウソウチクは食用として利用されてきた。戦前は管理が行われた。「侵入竹」問題が起きるには「侵入」する側、される側双方に事情がある。

「侵入」する元々竹林であった場所は中国から安いタケノコが輸入され、竹材がプラスチックに替わられたことで経営意欲が低下した。また竹林は傾斜地が多く高齢化に伴い作業が困難となり竹が外へ出て行くことを防止する管理をしないようになった。

同時期に「侵入」される竹林周囲では農林業の不振から経営意欲が低下し林地、耕作地への関心（監視）が低下し侵入してくる竹の駆除を行わないようになった。侵入竹は新しい問題であり研究がすすんではない。ただし竹生産管理の研究は既にあるのでそれを逆に活用し竹の侵入を防ぐことになる。

(4) 侵入竹を駆除するには

冬、地上部の竹を全部切る。地下茎が残り翌年タケノコが出てくる。これを7,8月頃養分を使い果たしあがる程度大きくなった段階で切ると地下茎への養分貯蓄が困難になる。3年程繰り返すと地下茎が弱りこの場所での竹の繁殖もおさまる。隣に竹がある限り次が来るがタケノコあるいは若い竹の状態であるので作業は楽になる。その他薬剤で枯らす方法もある。

切った竹は昔はあますところなく利

用し最後はたき木とした。現在では竹材としての利用、燃料利用もほとんどない。伐った竹をどうするか課題となる。1 箇所に集積する、竹材として活用する。環境調和剤として竹炭、竹酢液などをつくるなどがある。炭窯準備、火の管理、できたものの活用などの課題がある。

(5) 保安林について

今回話題になっている場所は保安林。保安林で木竹伐採する場合は一定の日数以前に最寄の農林事務所を通じ県に届出を出す必要がある。県が受理すれば作業にかかれる。タケノコや枯れ竹を倒すのに届出は不要。

2.フィールドワーク

今年の作業で枯れた竹を片付けた現地の様子を見ました。また民有地と自然観察の森の境界の尾根筋で民有地から自然観察の森に竹が侵入している様子を観察しました。



民有地は厚い土壌で、同じマダケでも太く、自然観察の森の竹侵入地は薄い土壌で、竹にとってよい場所ではない。広葉樹林で明るい場所であるため、竹が侵入してきたと思われるとのことでした。



質疑

Q. この場所に管理を加えなければどのような影響が出るか。

A. 根と光に影響が出る。一度竹がはいると竹の根に地下を占領され広葉樹の根が弱る。この現場の今生きている木も枯れる可能性がある。また広葉樹の樹高より竹が高くなれば光を奪われ広葉樹は弱る。後継の広葉樹の芽生えも暗くて出にくい。

Q. 現地にはどこから竹が侵入しているのか。これから先もっと拡大するのか。

A. おそらく土壌の状態がよく、広葉樹で明るい斜面上部（質疑の場所より少し上）から侵入。斜面下部は土壌がよいが、杉林で暗いため侵入できなかったと思われる。岩盤があるためこれ以上の拡大はないと思われる。地図上で尾根筋のずっと

上で等高線の間隔が広いところ（緩傾斜地）から上に拡大していないか気になる。

3.ワークショップ

室内にもどり、これから竹侵入地にどうかかわるか検討しました。

《ワーク1》 保全目標について検討

①竹林とする②二次林とする③現状維持程度の管理④管理しないという4つの選択肢を検討しました。「〇〇だから△という目標にしたい」と各自意見をポストイットに書き模造紙に貼って共有しました。竹侵入を防止したいという意見が多く②と③のどちらを選択するかについては意見が並行する中、保全目標についての検討はいったんおき森会が②か③の目標にむけて活動できるのか次のワークで検討しました。

《ワーク2》 森を育てる会が竹の侵入を食い止める作業をするかしないか検討。

① 会員・来園者にとって安全か②生態系によい影響を与えるか③会の目的に添っているか④施設の目的に添っているか⑤会の体力で可能か⑥個人の技術・体力で可能か⑦やりがいがあるかという項目ごとに会が作業をするかしないか検討しました。各自「〇〇だから作業をする、しない」と意見をポストイットに書き実現



可能性について5段階のどのあたりに位置するか模造紙に貼って共有しました。全体として「傾斜地で作業するなどの危険はあるが竹を伐採し二次林を回復するのが社会的にも意義がある、会・個人の体力の範囲でやってみよう」という考えが示されこれをワークショップの成果とし、うん・えー会で検討することになり

ました。

終了に際し、作業実施にあたっては本日あげられた課題をどう具体的にクリアするかが会にとって宿題であること、その検討・説明は保安林での作業申請業務を行なう自然観察の森管理者：福岡市、市民の森管理事務所に対しても必要となることを確認しました。

勉強会を終えて

ワークショップでは、皆の竹の侵入から森林を二次林に回復したいという思いの中に様々な要素を感じました。社会的課題へのチャレンジ、竹を伐採するという竹侵入地の作業の「わかりやすさ」、タケノコや材を活用するという楽しさへの期待などです。同時に老若男女にとって作業への参加しやすさ、安全などいくつかの課題をあげられた状況で市民ボランティア森会がどの程度作業をするのが「ころあい」か、上げられた課題をどう前向きにクリアし関係者に示すか など考えた勉強会でした。現地や講義で森林に関する社会的・自然科学的知見を休日をあて惜しみなく私たちに語った下さった猪上先生に厚く感謝申し上げます。

《世話役/報告 柴戸慶子》